

勝浦令子著

『孝謙・称徳天皇』

——出家しても政を行ふに豈障らず——

(ミネルヴァ日本評伝選)

ミネルヴァ書房 二〇一四・一〇刊
四六 三八〇頁 三五〇〇円

本書は、日本史上唯一女性でありながら皇太子を経て即位し、その後出家したうえで重祚し天皇となった孝謙・称徳天皇の生涯を丹念にあとづけたものである。以下、本書の構成に沿って内容を紹介していく。

誕生から皇太子として活動した期間までを描くのが第一章から第四章である。聖武天皇を父に、光明子を母に持つ孝謙・称徳天皇は、天武系と天智系の二つの皇統の血を父から、そして母と祖母からは政界の実力者であった藤原不比等の血をひいていた。その潜在的な血統の良さは、光明子所生の弟、某王が夭逝してからは一躍皇位継承者として注目されることとなった。孝謙・称徳天皇が本来男性だけが想定されていた皇太子になることができたのは、王権を護持する仏法を興隆する者が、皇位を継承するという仏教の思想を背景としていたからであると指摘する。

第五章は即位して孝謙天皇となった時代について、第六章は讓位し、出家を経て恵美押勝の乱に勝利するまでを描く。この期間には橘奈良麻呂の変や恵美押勝の乱といった政争が相次ぎ、また

父である聖武天皇と母である光明子が世を去ったことで、孝謙天皇は自身で皇統を維持していく必要があった。淳仁天皇との対立が頂点に達するにあたって、「変成男子」、すなわち出家することによって自ら性差を超越することで、女性としての限界を克服し、続く恵美押勝の乱に勝利していくことになるとする。

第七章から第十章で、出家したまま称徳天皇として重祚し、道鏡を重用して皇位につけようとするも、その構想が阻まれ、そして崩御するまでの過程を描く。常に皇位継承問題に直面してきた称徳天皇は、仏教と神祇の思想が混淆した「天」によって認められた人物であれば天皇になれると考え、その結果が道鏡を天皇にしようとする動きであったとする。この神仏習合ともいえる思想は、父である聖武天皇から受け継いだものをより進めたものであると指摘する。

本書の最大の特徴は、女帝論や奈良時代の政治史などを論じるうえでこれまでもしばしば言及されてきた孝謙・称徳天皇について、宣命や自作の願文、漢詩を詳細に読み込み、彼女の思想的背景に迫った点である。幼少の頃から父の聖武天皇と母の光明子の影響で仏教に親しんだ孝謙・称徳天皇は、皇位継承者として立太子する段階から、写経などを通じて独自の皇位継承理念を涵養していった。女性であることの限界を超えるために、「変成男子」として出家して世俗を超越し、王権を護持する仏法の継承者という側面を強調することで、自身の正統性を示そうとした。そして皇位継承問題でも、仏教優位の神仏習合の影響を受けた「天」の思想を導入することで道鏡への讓位を図ったが、官人層に受け入れ

られず、後世においては女性天皇の危険性を認識させる結果となつてしまった。こうした意味では、孝謙・称徳天皇も現実と理想の溝を埋めることができず、何より万世一系の皇統という壁を破ることができなかつたと指摘する。

現在まで多くの研究が蓄積されてきた女帝論や奈良時代の皇位継承問題、さらには奈良時代の政治史といった分野に、新たに「王権と仏教」、「女性と仏教」という視点を導入して、孝謙・称徳天皇の思想的背景に迫った本書は、奈良時代政治史研究に新たな一面を開くとともに、現代にまで続く天皇制について考える糸口にもなりうるだろう。多くの人に一読をお薦めしたい。

(垣中健志)